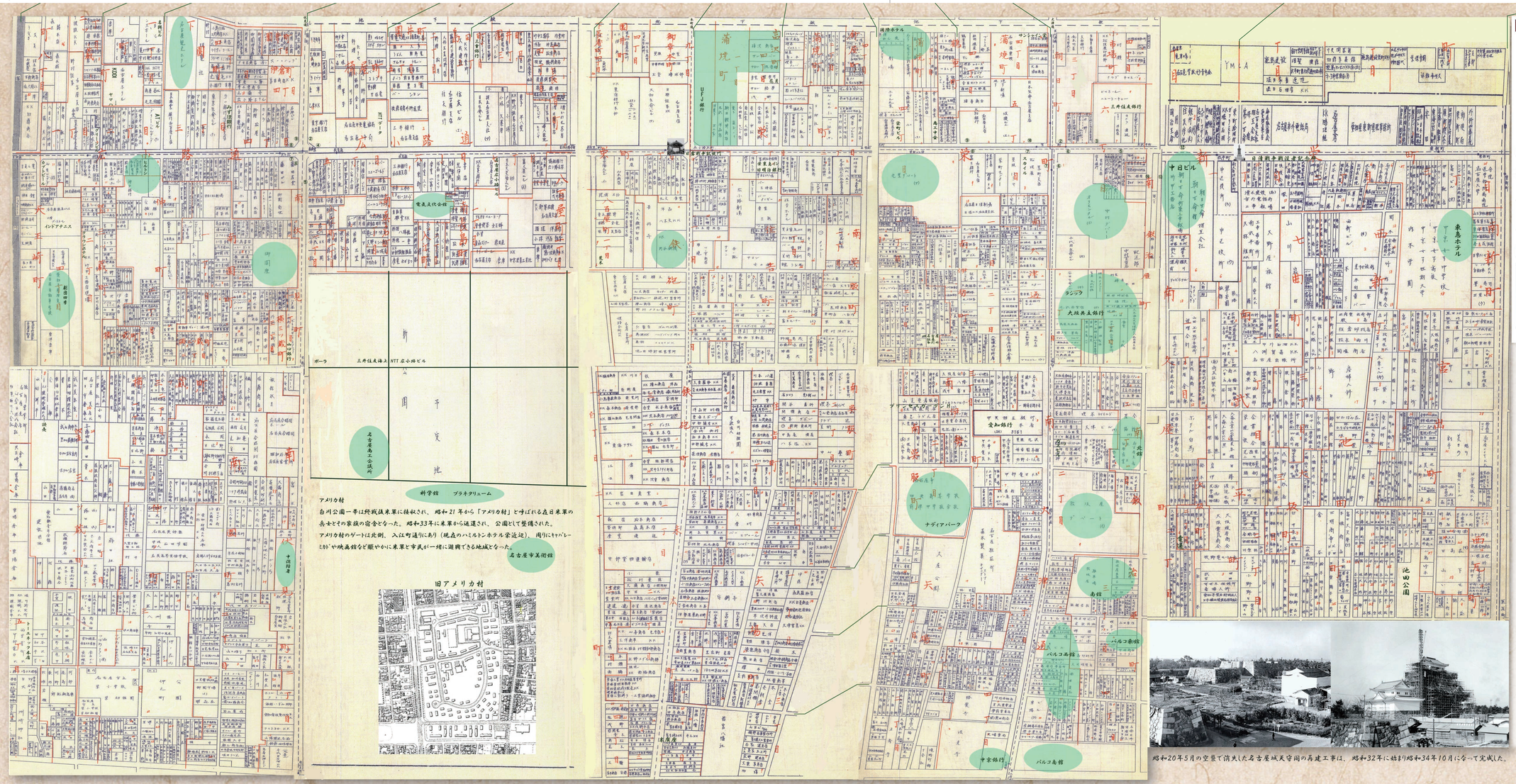

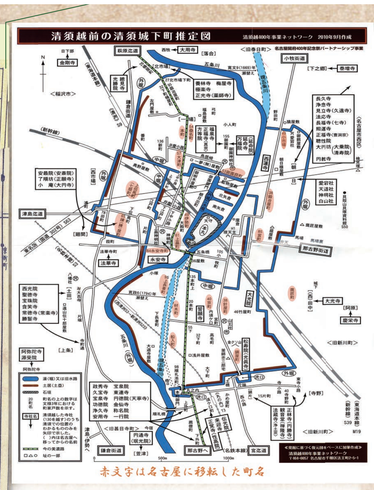

昭和20年5月の空襲で消失した名古屋城天守閣の再建工事は、昭和32年に始まり昭和34年10月になって完成した。

【 旧町名は、織田信長公ゆらいの文化財 】

清須城は弘治元年（1555年）、信長が那古野城から移って大改修を加えた後本拠とした。信長は清須城から桶狭間の戦いに出陣するなど、約10年間居城とした。

本能寺の変で信長がたおれると、次男・織田信雄が相続した。信雄は2重の堀の普請、大天守・小天守・書院などの造営を行った。

慶長14年（1609年）徳川家康によって清須から名古屋への遷府が指令されると、慶長15年より清須城下町は名古屋城下に移転された。（清須越し）

慶長17年になると、名古屋城を北端に南北には現在の本町通が、東西には伝馬町通が敷設され、これを中心に、名古屋城下の碁盤割の町割が実施された。伝馬町通は、東端で飯田街道とつながった。碁盤割の実施された範囲は、北は名古屋城に隣接する外堀筋（現在の外堀通）、南は堀切筋（現在の広小路通）、東は久屋町（現在の久屋大通南行）、西は御園町（現在の御園通。伏見通の一つ西筋）の範囲であった。御園町の西側には同時期に堀川が掘削された。

清須越しにより、家臣、町人のみならず、清須城下の町屋のほとんどが移転するとともに、清須城小天守も名古屋に移った。その際に「町名」も移転した。

この信長ゆかりの旧町名が抹殺されたのは昭和４０年前後のことであった。なお「丸の内」「泉」「錦」という現町名には、なんの歴史もない。

赤文字は清須越の町名

あ

◎朝日（あさひ）町。清須越の町。清須の朝日村出町から移住してきたので、旧号を用いて町名とした。

◎伊倉（いくら）町。清須越の町で、清須では鯛浦（うぐいうら）町と呼ばれていた。うぐいうらは言いにくいという理由で、伊倉町と改称。

◎和泉（いずみ）町。清須越の町あるいは遷府以前の町家であると二説ある。町内の酒屋、清水屋は、庭からわきでる泉を使い銘酒を造っていた。その酒銘、泉富貴浦のように商売が繁盛するようにと願って和泉町と命名した。戦前の碁盤の暮らしをしのばせる関所が、この町内には残っている。

◎伊勢（いせ）町。清須越の町。

◎魚（うお）町。江戸時代は永安寺町といったが、魚の棚筋の通にあり、魚屋・料理屋が多かったので、明治時代に東西「魚町」になった。

◎大津（おおつ）町。山城の国大津の四郎左衛門という男が、織田の繁栄ぶりを聞いて清須にやって来て住居をかまえた。四郎左衛門が住んでいた町は、いつしか大津町と名付けられた。清須越で名古屋に居住した後も、旧号をそのまま用い大津町とした。

◎桶屋（おけや）町。清須の桶屋町が名古屋に移住し、旧号を用い桶屋町と称した。町名の由来は清須時代、町内に家持桶師孫左衛門という者が居住していたからである。

◎大船（おおぶな）町。御船役を務める町であるために「大船町」となった。

◎小田原（おだわら）町。魚屋の町、小田原町に河内屋林文左衛門が料亭河文を開業したのは、元禄年間のことだ。以後、御納屋、近直、大又と続き、この町に料亭が開業し魚の棚四軒と呼ばれた。

か

◎神楽（かぐら）町。江戸時代に祠の拝殿跡の坂があって、神楽坂と呼ばれていたので町名になった。

◎蒲焼（かばやき）町。一説には、築城手伝いの人夫を相手の茶店を並べ、蒲焼を売っていたからという。

◎上堅杉ノ（かみたてすぎの）町。かつては富士浅間社の社地、神木の老木があった。城造営の際に切り倒して、巨木を南北に寝かせておいたので、杉ノ町と呼ばれるようになった。下堅杉ノ（しもたてすぎの）町もある。

◎京（きょう）町。清須越の町で、京都から清須へ多くの商人が移り住み、呉服物、細物、太物類を商っていたので、京町と名付けられた。名古屋の京町は、清須の呉服物の商店が並ぶ町から、薬種商の町へと変貌した。

◎桑名（くわな）町。清須の北市場にあった桑名町を移したので桑名町となった。

◎車（くるま）町。清須越の町。毎年六月に行なわれる那古野神社の例祭である天王祭は、名古屋屈指の賑やかな祭であった。その祭を取りしきり、山車（だし）の総元となったのが、町内に住む豪商（木綿問屋）磯谷星忠右衛門であった。山車を出す町というので、車町と名付けられた。「くるまんちょう」と呼ぶ人もいた。

◎小市場（こいちば）町。清須の「北市場」から移り「北市場町」と称していたが「小市場町」と改められた。

◎石（こく）町。江戸時代は町人の町だった。清須から移り、築城の際に石垣の石を切ったところから名付けられたという説もある。

◎木挽（こびき）町。名古屋城築城の時、ここに木挽小屋が造られ木挽職の者が居住していたので、町名とした。

◎呉服（ごふく）町。清須越の町（ただし異説もあり）。江戸時代には、医学者であり、植物学者伊藤圭介が住んでいた。

さ

◎材木（ざいもく）町。町内には堀川の舟運を利用して、木曽の桧などの良材が運ばれてきた。藩では上材木町、下材木町、元材木町の三ヵ町に居住する業者に限り、材木屋の称号を許した。

◎桜（さくら）町。町内の桜天満宮に桜の大樹があるため桜町となった。「さくらんちょう」と呼ぶ人もいた。

◎塩（しお）町。清須越の町名。塩の商人が多く住んでいたので、その町名になった。

◎四間道（しけみち）。尾張藩は防火のために道幅を４間（７．２㍍）にしたので、そう呼ばれるようになった。

◎七間町（しちけん）。清須越の町で、清須時代、裕福な家七軒が三階建ての家を建てたところから七間町と呼ばれた。

◎槌木（しゅもく）町。地形が槌木（鎚を打つ丁字型の棒）に似ているので町名になった。国道４１号線の路上には樹齢３００年の楠がある。

◎白壁（しらかべ）町。江戸時代は武家屋敷だった。居を構えた豊田太郎左衛門が屋敷の壁を白塗りにし、他家もそれを真似て白塗りにするところが増えたので町名になった。

◎末広（すえひろ）町。名古屋城の築城後、一帯が松原だったので「松原町」となったが、将軍綱吉の養女に松姫が迎えられると、松の字を避けて末広町と改名された。

◎菅原（すがわら）町。町名は桜天神社にちなんだ。

◎住吉（すみよし）町。町内に繁盛した酒屋住吉屋があり、大株を持つ商人だったので町名にしたという説もある。

◎駿河（するが）町。家康が駿府との往還の際に通ったので町名になった。

◎関鍛冶（せきかじ）町。清須越の町。美濃の関の鍛冶職たちが、清須へ引越し移住して来ていた所なので、関鍛冶町と名付けた。

◎園井（そのい）町。江戸時代は武家屋敷だった。

た

◎代官（だいかん）町。江戸時代に大代官太田九左衛門が居を構えたので町名になった。

◎高岳（たかおか）町。読み方は、かつては「こうがくちょう」だった。高岳院の名前が町名になった。

◎宝（たから）町。明治時代にできた町名で、宝の袋という祝儀にちなんだ。

◎主税（ちから）町。清須越の時に重臣野呂瀬主税が初めて住んだので町名になった。町内には元禄御畳奉行の朝日文左衛門の屋敷もあった。

◎長者（ちょうじゃ）町。清須越の町名。長者町を有名にしたのは、上長者町かいわいを根城とする盛栄連の組さんたちだ。天下の名士は千客万来、長者町通だけでも人力車詰所が五ヵ所もできた。芸者置屋は三十四軒で八十人（大正三年調べ）いた。下長者町は繊維問屋の町だ。幕末、いとう呉服店、十一屋など大店の呉服問屋の番頭が木町の裏筋にあたる二等地の下長者町に店を構えた。これらの店は、現金取引の廉価販売を行ない、大あたりして、繊維問屋長者町の名は全国にとどろいた。戦後、焼け跡の長者町通に、いち早く繊維問屋がバラック建ての店を建てた。

◎茶屋（ちゃや）町。呉服所茶屋中島氏が邸宅をかまえていたので、茶屋町と呼ぶ。享保十四年（一七二九）、将軍吉宗に献上するために、象が長崎から江戸へ向かった。名古屋城下では話し声ひとつもらしてはいけないという触れが出たので、人々は息をひそめて、両側の町家から、象が通り過ぎてゆくのをのぞいた。茶屋氏の屋敷で、藩主がお忍びで象を見た。松坂屋の前身、いとう呉服店が茶屋町にあった。

◎鶴重（つるしげ）町。清須当時は新町と呼ばれていたが、その後「鶴重町」と呼ばれるようになった。だが、将軍綱吉の娘、鶴姫と同じ町名では恐れ多いというので、本重町と改めた。

◎鉄砲（てっぽう）町。清須越の町。清須で鉄砲を製造する職人が住んでいたので、鉄砲町と名づけられた。

◎伝馬（てんま）町。清須以来伝馬役を務めていた。交通の要地、伝馬町には問屋場が置かれていた。常備の人足百人、伝馬百匹で美濃路、飯田街道、上街道、下街道をゆく旅人の便をはかっていた。本町通と伝馬町筋との交差地点には、高札が建っていて、札の辻と呼ばれた。

◎研屋（とぎや）町。刀剣商が多く居住していたので町名になった。

◎富沢（とみざわ）町。清須からの移転時は「伝馬役七軒町」だったが、その後「松本町」と改称。だが、藩主綱誠の娘、磯姫が松姫と名を改めたので、松姫の名を避け、町名を改めることになり藩の意向に従い、富沢町と町名を改めた。富沢町が歓楽街に変ったのは、明治時代になってからのこと。

な

◎中市場（なかいちば）町。清須越の町で、清須には北市場、中市場、西市場という市があった。

◎長島（ながしま）町。清須越の町。伊勢長島と清須との関係は深く、多くの人が長島から清須に移り住んでいた。長島町には藩校明倫堂があった。明治八年、明倫堂の跡地に東照宮が移った。東照宮の祭りは盛大だった。

◎長塀（ながへい）町。江戸時代は２大家老だった成瀬・竹越の屋敷が並び、黒塀が長く続いたので町名になった。

◎七曲（ななまがり）町。道が幾度も曲がっているので、その町名になった。

◎西鍛冶（にしかぢ）町。清須越の町である。清須越の折、農具や大工道具を作る鍛冶たちがこの町に居住したので、西鍛冶町と名付けられた。

は

◎針屋（はりや）町。清須越の町名。江戸時代は町人町だった。

◎東新町（ひがししんちょう）。万治３年（１６６０年）の火災の後、蒲焼町にあった武家屋敷を、東新町と西新町に移転したので、その町名になった。なお、交差点の一帯は「とうしんちょう」と呼ばれている。

◎久屋（ひさや）町。清須越の町。初代藩主義直がこの町を通った時「末々まで、この町は繁昌すべき所だ。これからは久屋町にせよ」と命じ、町名が改められた。

◎東片端（ひがしかたは）町。江戸時代は、片側だけに武家屋敷があったので「片端」と呼ばれた。

◎広小路。蒲焼町筋の南の横筋である。万治三年（一六六〇）の大火により、町家を払って広小路とした。

◎袋（ふくろ）町。清須本町の小塚田所の袋の内から移ってきたので、袋町と呼んだ。戦前は骨董屋の町、戦後は「夕子の長島町、ヨコの袋町」と呼ばれた有数の繊維問屋街。

◎伏見（ふしみ）町。名古屋開府以前から伏見屋六兵衛という商人がこの町に住んでいたので、その町名になった。伏見町は商家と医者の町であった。

◎富士塚（ふじつか）町。江戸時代は武家の広大な屋敷が並んでいた。富士権現を祀った塚山があったので町名になった。

◎船入（ふないり）町。堀川沿いで活躍した商人の史跡が残る。江戸時代の乾塩魚市場跡、幕末の開国で増加した洋物を統制するため尾張藩が設けた洋物改所の跡がある。

◎武平（ぶへい）町。松井武兵衛という武士が居を構えたので、初めは「武兵衛町」と呼ばれるようになった。その後「武平町」と改名された。

◎本（ほん）町。清須越の町。江戸時代はメインロードで、参勤交替で使われた。昭和４年、昭和天皇が名古屋に行幸になったさい、御幸本町通と改称した。行幸された際は、毛布を敷き、地にひれ伏して陛下のお通りを見送った。名古屋の中心の通りだけに、本町通りに店を構えるのは、商人の誇りであった。

ま

◎万（まん）町。古くは「万屋町」と呼ばれ、諸品を扱う商人が多くいたので、町名になった。その後「万町」に改名された。

◎御園（みその）町。清須の御園神明社のゆかりで御園町という（ただし異説あり）。下御園町には、江戸時代に名古屋の赤ひげ先生、伊藤玄沢が居住していて、医者のいない遠隔僻地の地まで往診に出かけた。

◎三ツ蔵（みつくら）町。清須越の町名。福島正則が清須城主だった際に非常用に蔵を３つ設けたのが始まり。堀川沿いの三ツ蔵は、尾張藩の米蔵があった。

◎皆戸（みなと）町。障子や襖を造る職人町で、皆が戸を作るゆえに皆戸町となった。

◎宮（みや）町。伝馬町筋の七間町より武平町まで。開府以前から古い神社があったことから町名になった。

や

◎矢場（やば）町。江戸時代に弓矢場が造られたので町名になった。

◎八百屋（やおや）町。野菜を商う人々が多く住んでいたところから八百屋町と呼ばれた。

【面白い町名あれこれ】

この地図のエリア外だが、名古屋には面白い町名（旧町名）がある。

（東区）◎「手代（てだい）町」。建中寺付近。作事方・水道方の手代屋敷があった。◎百人（ひゃくにん）町。百人組同心（足軽）の屋敷があった。（西区）◎紙漉（かみすき）町。江戸時代に紙漉場があった。◎鷹匠（たかじょう）町。殿様のお供をする鷹匠が居を構えていた。◎台所（だいどころ）町。◎山神（やまのかみ）町。（熱田区）夜寒（よさむ）町。「もろともになきあかしつるきりぎりすよさむのさとの草のまくらに」という古歌の歌枕に由来する。（西区）◎宿跡（しゅくあと）町。鎌倉街道の萱津宿の東宿があった。◎賑（にぎわい）町。中村遊郭内の町の１つ。遊郭は大須にあった旭郭を移転した。他に羽衣町、大門町、寿町、日吉町があり、周囲は１間の壕で囲まれ、中に８本の通りがあり、閉じた町になっていた。（中村区）木主（かこ）町。尾張藩の軍船を操る水主の役宅があった。

【 この地図が作られた昭和30年代 】

◎ 現天皇陛下は昭和34年にご成婚された。

◎ 昭和33年にデビューした長島茂雄は、35年も首位打者を獲り、4番打者ながら31盗塁を記録。

◎ 昭和34年にデビューした王貞治は三振が多く”三振王”と言われていた。
一本足打法が完成するのは37年であった。

◎ 大鵬は、昭和36年に横綱になった。

◎ 力道山は、ザ・デストロイヤー戦で6割以上の視聴率を誇ったが、昭和38年に刺殺された。

◎ 石田退三が社長になったトヨタ自動車は、昭和32年に対米輸出第1号（クラウン）を発売し、昭和34年に元町工場を操業開始した。

◎ 昭和35年の名古屋港の輸出品目は1位陶磁器、2位自動車、3位繊維機械だった。

◎ 中部日本放送は昭和31年に放送開始、地下鉄は32年に開通、名古屋城再建と伊勢湾台風は34年。

名古屋の旧町名を復活しよう！
発行：（株）北見地賃金研究所　社会保険労務士法人北見事務所　北見邑調　〒452-0805 名古屋市西区市場木町478 番地
電話 052-505-6237　地図は住宅地図協会が昭和35年に発売したものを加工した。　解説は「なごやの町名」（平成４年、名古屋市発行）を参考にした。平成２６年発行。　非売品　無断転載禁　名古屋の旧町名の復活を目指す有志の会
http://www.fukhatu-nagoya.com/　上下セットの「下」　講演「歴史に学ぶ経営」をご依頼下さい。